

2009 年度 政治外交史 I 期末試験講評



今回の問題文は下記の通りでした。

原敬の政治的経歴（キャリア）について説明したうえで、彼が近代日本政治の上に残した功罪について論じなさい。

1. 答案の作成方法について

最初に、どのような手順で答案を作成すべきだったか、私が補講で教授した手順に即して、見てゆきます。

①問題文を読み、出題者の意図を理解する。

- I. 今回の問題で問われているのは、まず第一に「原敬の政治的経歴」です。ここで注意すべきは、「原内閣」ではなく「原敬個人」のキャリアが問われているという点で、当然、彼が首相になる前のキャリアにも触れなければなりません。今回の答案の多くが、この部分を読み間違えていましたので、大幅に減点しました。
- II. つぎに、「彼が近代日本政治の上に残した功罪」についても取上げる必要があります。ここも「功績と罪過」の双方に言及されているかが問題となります。
- III. さらに、前者については「説明せよ」、後者については「論じなさい」とあります。ただし、この部分については、今回の採点ではあまり厳しくはみません（減点はしません）でした。

②必要と思われる論点を（紙に）書き出す。

- I. 上記の通り、答案において必ず言及すべき論点は、大きく言えば
 - a. 原敬の政治的経歴
 - b. 彼が近代日本政治の上に残した功罪の2つです。このどちらかが欠けたらあい（たとえばキャリアの説明だけで終わっている場合）、きわめて大幅な減点となります。
- II. また上述の通り、「首相になる前のキャリア」や「功と罪のどちらか」が欠けていても、それぞれ大幅に減点しています。
- III. 講義のレジュメに照らしていうと、だいたい45ページから49ページ、また59ページから60ページの内容を要約すれば十分ということになります。参考までに、答案に含まれていることが望ましい論点を、次ページ〔表I〕に書き出してみます。なお、あくまでも参考例ですので、これ以外の論点が含まれても構いませんし、とくに功績と罪過については、説得的であれば、これにこだわらず、各自が自由に書いてもらって構いません。
- IV. なお、答案用紙の裏や端の方に、メモが残っていた答案については、一応チェックをしました。このメモが良くできているものについては、とくに裁量点を附加した例もあります。

③答案全体の論理構成を組み立てる。

この点については、きちんと段落わけができているか、全体としてまとまりのある構成となっているか、といった面からチェックしました。思い付くままにダラダラと書き並べたような答案は、当然ながら減点しています。

なお今回の問題についていうと、「彼の政治的経歴に触れながら、並行して功罪も合せて論じる」形式と、「まず経歴について叙述し、そのあとでまとめて功罪を論じる」形式の2つが考えられます。これはどちらでも構いませんので、自分の書きやすい方で、構成を組んでください。

〔表1〕 論点リスト (参考)

(政治的経歴について)

a. 組閣前のキャリア

- ①西園寺公望・松田正久との政友会指導体制
- ②桂園時代の裏方としての役割 (「情意投合」)
- ③内務大臣時代の事績：内務省の政党化＝老朽淘汰と新進抜擢・地方政治への影響

b. 組閣後の事績

- ①選挙法の改正
- ②四大政綱

c. 原内閣の終焉：暗殺による

(功罪について)

a. 功績〈例〉

- ・政友会を責任政党として育て上げたこと
- ・四大政綱を通じて日本を発展させたこと
- ・選挙権を拡大し、民主化を推進したこと

b. 罪過〈例〉

- ・内務省の政党化により、党派人事を横行させたこと
- ・普通選挙の実現を遅らせたこと
- ・政治の腐敗を放置したこと

(結論)

④実際に答案を書く。

(省略)

⑤きちんと読み直し、おかしい所がないかチェックする。

- I. この作業をきちんとすれば、誤字や脱字などはかなり減るはずなのですが、誤字を理由に、減点した答案も少くありませんでした。もったいない話です。
- II. また、日本語として意味が通っていない答案も、複数枚見つかりました。これも一度、最初から読み直してみれば、すぐに気づくはずなのですが。

あくまで推測ですが、2回の補講にきちんと出席し (あるいは自分で録音などをチェックし)、まじめに努力した学生は、それなりの答案が書けていたようです。しかし、これらの努力を怠った (あるいは努力の形跡がまったく見られない) 学生については、点数のつけようがない、悲惨な答案が数多く見られました。

そもそも、事前に「内政関係で、個人に焦点をあてた問題を出題する」と予告していたわけですから、原敬が出題されることは十分に予想できたわけで、きちんと準備していたかどうかで、点数の面でも明暗がはっきりと分れたように思われます。

2. 期末試験の採点について

①採点に際しては、最初に下記の諸点に留意しつつ、大まかなチェックを行いました。

I. 設問に対して、きちんと解答をしているか。

→問題文をきちんと読めていない答案は、大きく減点しています。たとえば上記の通り、功罪についてまったく触れず、原の政治的キャリア（あるいは原敬内閣の業績）についてだけ書いてあるような答案（実際に数多くみられました）については、題意を満たしているとはいえませんので、大きく減点しています。

II. 論旨の明快さや論理性が、大学生にふさわしい水準に達しているか。

→一読して「何が言いたいのか、よく意味の分らない」答案は、大きく減点しました。また、段落わけがきちんとなされず、ダラダラと改行もなく書き続けている答案も、減点の対象としました。心当りのある人は、もう一度補講の内容を思いだし、「答案構成（設計図）」をきちんとしてから、答案を書き始めるようにして下さい。

III. 分量のバランスがとれているか。

→たとえば原の政治的履歴について長々と書いたあと、功罪についてはそれぞれ1行で終り、というのではいけません。また功績についてはかなり細かく書きながら、罪過は簡単に1行、というのも駄目です。つまりそれぞれの論点の分量が、バランスよく配分されていない答案についても、減点の対象となります。

②つぎに、以下のようなポイントをきちんと押えているか、チェックしました。

I. 必要な論点が揃っているか。

- a. 原敬の政治的経歴
- b. 彼が近代日本政治の上に残した功罪

本来なら、この双方がそろっていなければ、それだけで0点答案なわけですが、実際には「大幅減点」に留めています。また前ページに参考として掲げた論点のうち、どれくらい含まれているか、といった点にも留意して、採点作業をすすめました。

II. 解答の分量が不足していないか。反対に無駄な記述が含まれていないか。

試験時間は80分あるわけですから、それなりに分量が書かれていないと、全体としての評価はさがります。また反対に、出題と全く無関係の事柄がいろいろ書かれている場合も、やはり評価は下ります。「書いて置けば損にはなるまい」と考えたのかもしれませんが、結局「何が言いたいのか、よく意味の分らない」答案に近くなるだけです。全体としての印象は悪くなるだけです。「求められる知識を、論理的に、かつ過不足なく書く」ことを心掛けて下さい。

ちなみに書き終わっていない「未完結の答案」も、採点はしましたが、それなりに減点してあります。

III. 「基本的なミス」を犯していないか。

→とくに目についたものを、いくつか挙げておきます。

- ・原が組閣したタイミングを誤解している（彼が組閣したのは寺内正毅の後です）
- ・首相の任命権者を誤解している（当時の首相任命〔大命降下〕は山縣ではなく天皇の権限）
- ・原の所属政党を誤っている（憲政会や民政党ではなく政友会）
- ・原の導入した小選挙区制が、今日まで継続しているとする（男子普選と同時に中選挙区制となる）
- ・普選法案が出たときに、原が内閣総辞職をしたとする（正しくは衆議院の解散）

このような基本的なミスについても、すこし大きめの減点をしています。

③最後に、誤字脱字など、形式的なミスについてチェックをし、あまりに酷いものについては減点しました。

こう書くと必ず、「読めればいいのではないですか」といいだす学生が出てきますが、それでは同じように、誤字脱字だらけの履歴書やエントリーシートを、就職活動で提出したら、どういう結果になるかを考えて

ください。試験中は辞書を引けないので、ある程度までは大目に見ていますが、あまりに酷いものは、減点の対象としています。

またもうひとつ、今年の採点で気になったのですが、「レジュメ形式」や「箇条書きの答案」が、複数枚ありました。大学の試験で「論述式」の場合、基本的にレジュメ形式や箇条書きは認められません（一文ごとに必ず段落変え＝改行しているものも含む）。これらは形式違反の答案として、大きく減点しています。そのような答案を書いた記憶のある人は、高校時代の「小論文」を想起して、あのような「論理的な段落わけと、内容的な起承転結のある」文章を書くようにしてください。

- ④その後、加減点や裁量点なども合算して、最終的な成績を算出しました。答案がボロボロでも、加減点のおかげでA評価になった人がいる一方、答案そのものは素晴らしいのに、加減点によりCになってしまった人もいます。したがって、成績表にAがついていたとしても慢心せず、またCだったとしてもガッカリせず、今後もよい答案が書けるよう、精進して下さい。

なお自分の答案について、より詳しいコメントや指導を希望するひとは、質問票を教務課に提出してもらえば、随時対応します。ただし成績の変更（確認）を要求するのであれば、かならず正式な「成績確認制度」の方を利用するようにしてください（直接連絡をもらっても、制度的に対応することができません）。

3. 成績分布について

- ①履修登録者全体（講義に一度も出席しなかった者も含む）における成績分布
A：23.1% B：10.1% C：19.9% X：23.1% 無資格・欠席：23.8%
- ②期末試験受験者における成績分布
A：30.3% B：13.3% C：26.1% X：30.3%

〔解答例〕

一 原敬の政治的経歴（キャリア）

(1) 原敬は、伊藤博文が総裁を退いた後の政友会を、西園寺公望や松田正久とともに指導した。彼は、その手腕をふるって政友会をまとめあげ、山縣・官僚派の中心人物であった桂太郎と交渉し、一種の提携関係を構築する。のちに「情意投合」と呼ばれることになる、この協調関係に基き、明治末までの日本は、桂と西園寺が交互に政権を担当する「桂園時代」となる。原はこの「桂園時代」を、裏で演出していた。

(2) 一方で彼は、桂と激しい対立も繰り返している。その一つは内務省の人事をめぐる争いで、原は第1次西園寺内閣などで内相に就任すると、「老朽淘汰・新進抜擢」を名目に、政友会に近い人物を要職に就けたのである。その結果いわゆる「内務省の政党化」と呼ばれる現象が生じるが、もともと内務省は、官僚派の牙城といえる官庁であり、それは当然、桂との対立を招くこととなった。さらに内務省の官僚は、全国の府県に知事として派遣されていたから、同省の政党化の動きは、地方政治にまで影響をおよぼすこととなった。

また原は、いわゆる大正政変のさいにも、桂と対立している。すなわち第3次桂内閣に対して、衆議院で内閣不信任決議案を提出することで、その退陣の引き金をひいたのである。

(3) その後、第1次山本権兵衛内閣でも内相を務めた原は、第2次大隈内閣、寺内正毅内閣を挟んで、1918年9月に自ら組閣することとなる。原は憲政史上、爵位を持たずに首相となった最初の人物（平民宰相）であると同時に、現職の衆議院議員として、また明治維新で「朝敵」となった藩の出身者として首相となった、最初の人物でもあった。

彼は、外相・陸相・海相以外の総ての閣僚を政友会員で固める、本格的政党内閣を組織する。そして衆議院議員の選挙法を改正して有権者の資格を緩和、小選挙区制を導入したほか、「国防の充実・交通機関の整備・教育施設の改善充実・産業および通商貿易の振興」の四大政綱を掲げて、これを強力で押し進めて行った。

(4) 原内閣は、当初の予想に反して、3年以上の長期政権を維持した。しかも衆議院の絶対多数を押え、議会外（官僚・財界・軍部等）にも政友会の勢力を扶植するなど、各方面で圧倒的な影響力を維持することとなる。しかしその政治的キャリアは、1921年11月、東京駅で原自身が暗殺されることで、終りを告げることとなった。

二 彼が近代日本政治の上に残した功罪

(1) まず功績についてみると、第一に、政友会を「政権担当可能な責任政党」として育て上げたことが挙げられる。そして日本最初の本格的政党内閣を作り上げ、藩閥や官僚に頼らずとも、「政党が政権運営の主役として十分に機能すること」を、実績によって証明してみせた。

次にその政権期に、上記の四大政綱を通じ、日本が近代国家として通用するよう、大きく成長させたことである。たとえば鉄道や港湾を整備すること（交通機関の整備）で物資の流通を容易にしたり、私立大学を認め（教育施設の改善充実）、国民が高等教育を受ける機会を増やした点などは、大いに評価できる。

さらに、選挙権の拡大は、後に触れるように議論はあるものの、国民の政治参加の機会を拡大することとなった。これにより日本政治の民主化が進展したことは否定しがたい。

(2) 他方、その罪過についても無視することはできない。まず挙げられるのは、内相時代の党派人事が、（非政友系の）有為の官僚から手腕を発揮する機会を奪い、またその意欲を削いでしまったことである。

つぎに原内閣期についてみてみると、彼は選挙権の拡大には応じたものの、普通選挙運動にはきわめて冷淡であった。彼は野党が普選法案を提出すると、衆議院を解散して総選挙を実施、これに圧勝することで普選運動を沈静化させてしまったのである。上記の功績と矛盾するようであるが、彼が、日本における（男子）普通選挙の実現を遅らせたことも、また間違いのないであろう。

さらに上記の四大政綱のうち、国防を除く3項目は、その具体化に際して、利権提供を通じた政友会の党勢強化に利用されることとなった。その結果、汚職事件が続発するが、原は衆議院の政友会絶対多数を背景に、野党や国民の批判を押し切る。そのため、国民の間に政党（政治）不信が広がることとなった。

三 結論

原敬は、そのキャリアから見ても、功罪からみても、近代日本史上、稀にみる剛腕の政党政治家であった

ことがわかる。今日、彼の手腕は「平民宰相」というキャッチフレーズとともに、肯定的に評されることが多い。むろんそれは間違っていないのだが、その一方で、その罪過の面にも眼を向け、公平に評価することを忘れてはならないであろう。

以 上

※これはあくまでも「解答例」であり、この通りに書かねばならないわけではない。